

徳島大学 i. school における学生ディスカッションパートナーとしての学びと成長について

西田大連¹⁾²⁾, 中井里沙¹⁾²⁾, 玉有朋子²⁾³⁾, 片山哲郎²⁾⁴⁾⁵⁾, 小出静代²⁾⁶⁾, 金井純子²⁾⁵⁾, 石原佑²⁾³⁾, 北岡和義^{2)3) 7)}

- 1) 徳島大学生物資源産業学部, 2) 徳島大学 i. school, 3) 徳島大学高等教育研究センター, 4) ポスト LED フォトニクス研究所, 5) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部, 6) 徳島大学経営企画部 大学経営企画課, 7) 徳島大学教養教育院

1. はじめに

徳島大学 i. school は、イノベーション教育プログラム i. school の教育手法を、i. school の運営団体である一般社団法人日本社会イノベーションセンターの支援と正式な認可の下、2022 年より徳島大学で提供している。今年で3期目となるこのプログラムでは、参加学生が年5回のレギュラーワークショップを通じてイノベーションの手法やアイデア評価手法を学んでいる。筆者は2023年に通年生として徳島大学 i. school に参加し、今年度は通年生を支援するディスカッションパートナー(DP)として参画している。ここでは、徳島大学 i. school の取り組みと、2年間の参加を通じた筆者の成長について述べる。

2. 徳島大学 i. school への応募動機

筆者の徳島大学 i. school に参加した動機は、2つある。1つ目は、筆者は「誰もが好きなものを好きなだけ食べることのできる世界」を、「食」の商品開発を通して実現するというビジョンを掲げており、既存の「食」の価値観にとらわれないアイデア創出のために、イノベーションを興すためのアイデア創出法について学び、自身のビジョン実現のために活用したいと思ったためである。2つ目は、コロナ禍の影響で筆者がオンラインでの講義がメインであったため、新しい交友関係の刺激を受ける機会を欲していたからである。

3. 徳島大学 i. school 通年生としてのプログラム参加

3-1. DP を体験する前

徳島大学 i. school のワークショップ (WS) 参

加を通じて、学部1年時のコミュニティでは出会うことがなかったさまざまなバックグラウンドや情熱を持った参加者との交流をすることができた。また、WSを通して他の参加者の出す意見の質の高さやコミュニケーション能力の高さを実感したことで、自身には人と議論をする経験や議論の質を高めるテクニックが足りていないことが分かった。さらに、他の参加者と意見を交わすうちに、WSそのものの目的や、手法ごとの目的などを理解しないまま参加していたことに気づいた。

3-2. DP を体験した際に筆者に起こった変化

WSの手法を理解するために2023年8月に徳島大学 i. school と徳島市健康長寿課が連携して開催した学外WS「認知症の人に優しい暮らしのアイデアを考える」にて、参加者の議論を支援するDPとして参加した。運営側がWSの内容を確認するためのプレWSにて、WSの全体像を見つめることで、WSそのものの目的や実際に用いる手法とその手順について理解することができ、アイデアにたどり着くまでの道筋を確認した。また、いつもは学生だけで実施していたWSを様々な世代の人々で行うことにより、いつもとはまた違った角度の解釈や示唆が出てきた。その要因として、年代ごとに様々な思考のバイアスが存在しているだろうと考察した。そして、WSは参加者が出す解釈からその根底に存在する価値観を知る手段としても非常に有効であると考えられるようになった。

4. 通年生を終了した筆者の状態について

認知症のWSを通して、DPとしての立場で参加

することで、その裏側にはアイデア創出に至るまでの道筋が設計されていること分かった。また、手順ごとに目的が存在していることを知り、それ以降のレギュラーWSにおいても常にWSの裏側にある設計や手順ごとの目的を意識して臨むようになった。反対に、徳島大学 i.school でのレギュラーWSでは、受講生としての立場で参加している以上、参加者としてWSの全体像を把握できないまま体験したため、より深い学びを得ることのできる余地はまだあると感じた。また、これからの活動にアウトプットしていく上で実践的に使えるレベルになったとは感じる事ができなかった。

5. 学生 DP としてのプログラム参加

学外WSを通して「徳島大学 i.school」のWSはアイデアを創出するだけでなく、参加者の意見の中に隠れた価値観を発見することも可能であり、コミュニケーションや振り返りの場などで非常に有効な手法であると実感することができたと同時に、イノベーションWSを設計し、自身の活動にアウトプットできるレベルまで学びきれたとは言えない状態であった。このような背景から、WSの目的と設計意図を踏まえた上でWSに臨むことで、より設計や運営などのデザインの観点からWSについて学び、自身の活動へ応用できるようになることを目的としてDPとしてプログラムに参加することを志望した。

DPとして、WSを運用するには自分がワークについての知識を事前にインプットを行い、ワークの際に、「このWS全体における目的は何なのか」「何のためにこの手順を行っているのか」などのワークに対する自身の理解を参加者に共有する必要がある。その過程でよりWS自体への理解を深めることができた。また、参加者の意見を受け止め、簡潔にまとめて共有するフローを繰り返すことで、よりWS全体の質を高めることにでき、ファシリテーション能力そのものを向上させることができた。

6. 他の活動に対してのアウトプット

6-1. Hack with Tokushima での優勝

徳島大学とクラウドエース株式会社、大日本印刷株式会社が共催して行われたハッカソンイベント「Hack with Tokushima」に参加し、優勝することができた。要因としては、運営が掲示することをそのまま実行するのではなく、徳島大学 i.school で学んだ、ゴール達成のための設計としてどのような意義があるのかに着目し、チームメンバーと共有しともに考え抜いたことで、優勝に値するようなアイデアをチームで生み出すことができたことにあると分析している。

6-2. COC+R 事業での実践

徳島大学「人と地域共創センター」にて実施されている、COC+R 事業の一環である「実践型インターンシップ」のサポーターとして活動する中で、成果報告会での振り返りのWSを、徳島大学 i.school での経験を活かし、筆者が主体となり設計するようになった。

7. これからどのように成長していきたいか

筆者は現在目的の見つめ直しなどにおいては、ある程度のWSの設計ができるようになったが、アイデアの創出に関してのWSができるようになったとはまだ言い難く、いずれはビジネスの場でも通じるようなWSの運営ができるようになりたいと考えている。

8. 参考文献

- 1) 堀井秀之/日経 DP (2021) 『イノベーションを生むワークショップの教科書 i.school 流アイデア創出法』
- 2) 北岡和義, 玉有朋子/大学教育研究ジャーナル 第20号 (2023) 『徳島大学 i.school の構想と実現、そしてその展望』